

## 『フォーラム第9号』によせて

名和 隆央

大学生の「学力低下」が数年前から論じられている。いくつかのデータも明らかにされているが、私も授業のなかや試験の採点で実感させられることがある。しかしそれだけではなく、さまざまな社会問題にたいする大学生の感性が薄れているように思える。学校教育のあり方に問題があるのか、子どもの成長過程にわれわれの時代とは異なる変化が生じているのか、原因は分からないけれど、問題が生じているのはたしかであろう。

2004年度から全学的に「学生による授業評価アンケート」が始まる。学生がどのように教員の授業をとらえているかは、われわれが授業を改善し教育力を高めるうえで不可欠の情報となるだろう。学生の評価や要望におもねる必要はまったくないのだが、学生の授業評価をとおして逆に、彼らの置かれている状況を知ることができる、ということが重要だ。いまの学生のあり方を前提としなければ、授業や教育が成り立たないという現実を厳しく受け止めなければならないのである。われわれ教員相互が情報を交換し合い、切磋琢磨してこの現実に向き合わなくてはならない。将来の社会を担う学生の質、すなわち知識や判断力や実行力を高めることができなければ、大学教育の価値そのものが問われるだろう。今回の『フォーラム』の特集「教育評価、それは可能か」は、その意味で時機に適ったものといえる。ぜひお読みいただき、議論のたたき台にしてもらいたい。

さて全カリでは、新学部・新学科の発足する2006年度改革に向けての取組みが始まっている。総合教育科目では、総合A群科目のカテゴリーの見直し、科目内容の再検討、武蔵野新座と池袋との展開コマ数の適正配置、学生の保険履修の抑制、成績評価のあり方などが検討課題となっている。実務作業はたいへんであるが、この機会に立教大学における教養教育の位置づけ、教育理念＝リベラルアーツの再確認、学部専門教育と全カリ教養教育との連携、全カリの組織運営のあり方を多くの教員の参加のもとに幅広く議論すべきであろう。ややもすると教養教育は全カリに「お任せ」という感がなきにしもあらず、である。しかし専門教育と教養教育は、密接な連携によってこそその実を挙げることができる。全カリに多くの教員が参画し、専門を異にする者同士が意見を交換し合い、学問のあり方を問い直すことで、立教大学の総合的な教育力を高めることができるのである。

なわ たかお（全カリ運営センター 総合部会長）